

独の視察団 白峰へ

ドイツ南部で再生可能エネルギーを生かしたまちづくりをしているレッテンバッハ村の関係者が来日し、七日から白山市白峰地区を視察する。これに先立って関係者は六日、金沢大で再生可能エネルギーによるまちづくりについて大学関係者らと意見交換した。

金大で意見交換



レッテンバッハ村の人に白山市白峰地区の取り組みを紹介する風聡一郎さん(右)=金沢大で

再生エネルギー活用 まちづくり

意見交換には金沢、白山市両市職員も加わり二十五人が参加。白峰地区のまちおこしに携わる同大学院地域創造学専攻一年の風聡一郎さん(右)が未使用の間伐材をポランティアがまきにして利用する取り組みを紹介。「未利用の森林資源を活用して地域活性化をしたい」と今後の展望を話した。

レッテンバッハ村のウィルヘルム・フィッシャー前村長も登壇した。人口五百八十人だった同村は太陽光などによる発電やまきポイラーでの熱供給に力を入れて復興。エネルギーを自給自足でき、関連事業で雇用も創出し、人口は八百三十人まで増えたという。フィッシャー氏は「まきや太陽などを使うことで村全体の収入が上がった」と強調した。

大学関係者らは資金繰りやドイツの他地域での類似例などを質問。フィッシャー氏は「自分たちがやりたいう形で事業を進めるため助成制度は使わなかった。他では市民に関心を持つ人が少ないようだ」と話した。

東日本大震災以降の日本の地域事情を視察する目的でドイツ大使館などが主催している。(山内晴信)